

江戸の音曲（三味線音楽）の楽しみ方

落語芸術協会音曲師 桂 小すみ

■まずはお伊勢さまにお祈りしてから

私は三味線が大好きでこの仕事をやっています。三味線は和楽器ながら昨今では身近なものになったので、本日はみなさんの三味線への馴染み度合いも伺いつつ、話題を探っていきたいと考えています。まずはみなさんの益々のご健康を願って、「伊勢音頭」を奏で、お伊勢様にお祈りしてから講義を始めさせていただきます。

「伊勢音頭」演奏（約1分）

■ジャンルで異なる三味線の棹の太さ

三味線は棹（さお）の太さで分類すると「細棹」「中棹」「太棹」の3種類あり、自分は細棹を使っています。細竿は幅 2.4cm くらい、太棹は 2.6-2.7cm くらいで、サイズに大きな差はありませんが、細棹を使う自分にとり太棹は「本当に太い」と感じられます。

私は細棹で「長唄」というジャンルの音楽を学んでいます。長唄は「清元」「常磐津」と並び、歌舞伎と共に発達した劇場音楽です。清元と常磐津では中棹の三味線が使用されます。「5 挺 5 枚」とは三味線演奏者 5 名と唄い手 5 名が音楽を奏でる、との意です。

「端唄」「小唄」という、いわゆる室内楽で少人数で演奏されるジャンルもあります。

「文楽」「人形浄瑠璃」にともなう音楽は「義太夫節」。これは太棹三味線を使うので音色が著しく異なります。上方においては、箏と三味線の合奏する音楽「地歌」があり、これは中棹三味線を使います。楽器の形態も、それぞれ微妙に異なります。

三味線の歴史は、大陸の楽器が沖縄に伝わって三線（さんしん；蛇皮を使う楽器）となり、それが堺に伝わって琵琶法師たちの手で三味線に改造された、との定説がありますが、何しろ 400 年以上前の話でもあり、また大陸中国には日本の三味線によく似た楽器がありますので、それがそのまま日本に伝わったと考えるほうが自然かもしれない、と思っています。

知名度が高い津軽三味線（青森県）や、秋田県には秋田三味線があり、このように三味線は細分すれば実にさまざまな種類があります。種類によってその形態、糸の太さ、皮の張り方、駒（糸張り）の材質（象牙/べっ甲/竹）、撥（ばち）の形と材質、などもさまざまです。

■異ジャンル間での交流は難しい

ばちの振り降ろし方などの演奏方法も三味線のジャンルによって異なります。三味線界はジャンル毎のタテ割り社会で、個々のジャンルで個別に行動しており、演奏する曲も異なり、皆で集まって何かしようという異ジャンル間での交流・共同行動が従来ありませんでした。

明治になり洋楽が日本に入り、更に戦後になって「三味線の世界も、ジャンル毎の個別活動ばかりでなくみんなで何かしたほうが良いのではないか」「共通言語として五線譜を三味線音楽にも導入



することで、異なる邦楽ジャンルでの合奏も可能ではないか」との考えが提唱され、その方向に向けた動きも数十年来試みられています。ですが、三味線演奏者は五線譜で考えながら演奏してはいない（五線譜とは異なる思考で演奏している）ので、クラシックやロックなど異ジャンルとの相互理解と共同行動を進めるには課題も多いです。

さて私は長唄を学んでいますので、長唄の名曲をひとつお届けしたいと思います。寄席の音曲の「種づくし」という曲で、文化8年（1811年）に作曲されたといわれる長唄「越後獅子」の一節です。ちなみに越後獅子は、当時歌舞伎で坂東三津五郎一座と競っていた中村歌右衛門一座が、坂東の当り劇「七変化舞踊」に対抗すべく、一晚で作曲や振付を完成させたとの逸話があります。「種づくし」では歌詞に「種」が多用されており、これを数えながらお聴きいただければ、やすらかにお休みいただけるかもしれません。

「種づくし」演奏（約1分）

■「蝶々夫人」に出てくる「越後獅子」

越後獅子は作曲から約100年後（1900年代初頭）、イタリアに渡り、「種づくし」の一節が世界中のオペラハウスで演奏されています。オペラの巨匠プッチーニ（2024年は没後100年）がオペラ「蝶々夫人」の曲で越後獅子を引用したため、15才の芸者蝶々が、米軍人ピンカートンと結婚する場面で、没落士族の娘である自分の出自をこの一節で唄います。皆さまも「蝶々夫人」を聴かれる折、越後獅子が出てくるこの一節を意識しつつお聴きいただければ幸いです。

「蝶々夫人」には、越後獅子のほか、「かっぽれ」「お江戸日本橋」「宮さん宮さん」など当時流行した邦楽曲も取り入れられています。これらの曲が五線譜に記されプッチーニに渡され、それらをプッチーニが自作オペラ曲の中に引用しました。その五線譜を国会図書館で閲覧することが出来ませんが、さて誰が五線譜に記してプッチーニに渡したのか。これについて従来は「当時の在イタリア日本公使夫人である大山氏が記し渡した」と考えられていましたが、最近になり、紀州徳川家16代当主徳川頼貞氏の著作本から「五線譜をプッチーニに渡したのは大山氏であったが、五線譜に音符を記したのは幸田露伴の妹である幸田 延（当時ウィーンに音楽留学中）であった」と判明しました。この新発見を自分は今年5月末に上野の寄席で話し、また、岩波書店の「図書」という冊子に書きました。同冊子はこの8月に発行されるので、よろしければご覧いただければと思います。上野の寄席で話した2日後、札幌に向かう途中の羽田空港にて「桂小すみ師匠でしょうか」とある青年に話しかけられ、「2日前の上野の寄席でお話を拝聴した。自分は国会図書館に勤務し徳川頼貞を研究している」とのことで、越後獅子に伴う不思議な縁を感じました。

■三味線と楽譜

さきに「異ジャンル三味線間の交流は限られる」とお伝えしましたが、明治時代に洋楽と五線譜が導入された後、異なる複数の三味線流派により異なる三味線楽譜記譜が作られました。現在、長唄においては4-5種類の楽譜記譜があります。記譜がこれだけ異なるということは、異なる流派間で一緒に演奏する機会がなかった証しです。元来は「三味線の音楽を紙に記すことなど出来ない」、うがった見方をすれば、楽譜化されたら三味線を教えることを生業にしている人々が不利益となると恐れたかもしれません。そのように根強い反対はありましたが、最近では、三味線の楽譜があることが一般的になってはきました。ですが、楽譜はあくまで備忘録的な役割で、私の師匠も、稽古をつけてくださる時に楽譜は使いません。

楽譜がない三味線音楽を、どのように師匠から弟子に伝えるのか。邦楽では三味線に限らず「しょうが（唱歌）」と言う、ひらがなで音を表記し、手で拍子をとって声に出して歌う、それを覚える材料・伝える材料にするやり方が行なわれてきました。

三味線の糸は「太」「中」「細」の3本あり、それらを使い分け、更に糸の押さえかたと弾きかたを変化させることで、さまざまな音を出すことが出来ます。三味線での唱歌では押さえずに弾く

開放弦は一の糸「ドン」、二の糸「トン」、三の糸「テン」。押さえて弾くと一と二の糸は「ツン」、三の糸は「チン」、といった感じです。

代表的な音を幾つか演奏

■「ちりとてちん」も三味線奏者の楽譜

「チントンシャン」という表現があります。「チン」は一の糸押さえて、「トン」は二の糸の解放弦、「シャン」は糸2本同時に弾くことで、この「チントンシャン」は我々三味線演奏者にとっての楽譜のようなものです。数年前「ちりとてちん」というTVドラマがありましたが、この「ちりとてちん」も、三味線奏者にとっての楽譜です。

■三味線の普及度は地域により異なる

みなさんの中で三味線を練習された方はおられるでしょうか？（練習した人は皆無だった）。三味線の普及度は地域によって差異があり、例えば自分が住む市川市においては、市川駅前周辺では長唄はポピュラーでない模様ですが、北部（松戸市寄り）では長唄を三味線で演奏すると唄い出す方が大勢おられました。このように、何が要因なのか判りませんが、三味線の普及度は地域によりなかなか予測が出来ません。三味線に限らず、着物でもその他のものでも、日本の伝統文化を反映するモノや芸能は、日本人のアイデンティティ形成に資する役割が大きいと思いますので、これらが消滅せず維持される社会となってほしいと願っています。

長唄における三味線の音の出し方は、バチ（撥）で「ひっぱたいて演奏」します。例えて言えば、（今はなくなりましたが）水銀体温計で体温を測った後、上がった水銀を下に戻すために手首スナップを効かせて体温計を振る。そのイメージでバチでひっぱたき、ピタッと停める（滑らせない）。これを、望む音が出せるようになるまで反復練習し、身体に覚えさせます。

■バチを動かす動きが健康にいい？

私は指圧を習っていますが、持論ながら、三味線のバチを動かす動きが、健康にいいのだろうと考えています。小指・薬指でバチを振り落とすことで東洋医学の「丹田」「腎経」が刺激活性化され、健康につながるのではないかと。三味線界においては80代、90代で健康に活躍しておられる演奏者も多く、70代は若手と言われるほどです。健康な高齢演奏者が多いことは、三味線界の中では良く知られています。外の世界に伝えられることは、昭和時代まではありませんでした。必ずしも現代にはそぐわないと思うので、本日はお伝えさせていただきました。

■着物は三味線演奏に必須のアイテム

私は三味線を学び始めるまでは着物を着ることがありませんでしたが、三味線を弾くには着物を着ることが必要です。着物を着て正座することで安定して三味線を保持し易くなります。糸（弦）を張って調弦する時は、糸巻を着物の帯に強く押し当ててから手で回します。着物帯は厚く堅いのでこのような作業が可能ですが、例えばTシャツではこれは出来ません（糸巻がお腹に食い込む）。このように、着物は三味線演奏に必須のアイテムで、更に、絨毯やフローリングよりも畳が敷かれていると良い、フスマがあると雑音をうまく吸収してくれて三味線の音の響きが良くなる、など、三味線を良く演奏するためには、昔の日本の座敷のかたちがすべからく求められます。このような点も、私が三味線に魅力を感じる要素となっています。

■身体を使うお稽古ごとを！

一方、三味線は絶滅危惧種となっています。三味線を学ぶ人は減りました。最近の小学生は塾ほかで忙し過ぎます。三味線に限りませんが、何か、身体を使うことをお稽古してほしいと思っています。現代の身体の使い方とは全く異なる「日本古来の身体の使い方」があり、そのことを知るのには90代以上の方々に限られると思いますが、そのような古来の知恵を、良いものは傳承し、残していただきたいと思っています。「日本古来の身体の使い方」には人間の「動物としての強さ」も含まれており、古くても良いものは残す、新しくても良いものは取り入れる、とのやり方が良いのではない

かと思えます。

■該当する場面を示す「お約束音楽」

長唄、三味線は歌舞伎とともに発達しました。このため「この三味線音楽が奏でられた場合、該当する歌舞伎の場面はこれだ」という「お約束の音楽」が沢山あります。NHK アーカイブスの昔の歌舞伎放送などでは、解説アナウンサーが「この音楽は〇〇〇です」と解説していました。現代ではそうした解説は行なわれなくなりましたが、歌舞伎のイヤホンガイドでは解説されているかもしれません。こうした「お約束音楽」をいくつかご紹介します。

江戸庶民にとって隅田川はアミューズメントエリアでした。夏は夕涼み。舟遊び。歌舞伎では隅田川の場面で必ず、この曲が演奏されます。

「佃」演奏（約30秒）

以前はこの曲は隅田川の場面限定で演奏される曲でしたが、現在では、水や川の場面全般でも演奏される曲になりました。吉原の場面では、必ず以下の曲が演奏されます。

「さわぎ」通常速度で演奏（約10秒）

三味線は演奏の速度を変えると曲の印象が全く変わるので、しっとりした場面であれば、

「さわぎ」ゆっくり演奏

例えば、花道から若者が登場する活発な場面であれば、

「さわぎ」高速で演奏

このように、場面により速度を変えて演奏します。

唄と三味線の関係は、唄がメロディで三味線が伴奏する、との名目となっていますが、「さわぎの唄」においては、三味線が非常ににぎやかで、単なる伴奏ではなく唄と付かず離れずで演奏されます。

「さわぎ」演奏と唄（約2分）



このようににぎやかな唄と曲で、かつて私を音曲の世界に導いてくれた玉川スミ師匠（故人）が「さわぎの唄を先ず唄え。このにぎやかな曲を寄席で唄って客が乗ってこないようなら、会場に火をつけろ」と（冗談で）おっしゃっておられたことを思い出します。

■500回深呼吸すればいかなる病も治る

ちょっと体操をしたいと思います。先ほど「三味線と健康」のところで人体のツボの話をしました。ケイラクのひとつに「ハイケイ（肺経；肺の経絡）」というツボがあります。呼吸に関係するツボで、手の親指を通っています。

手を前に出して開いて、息を吸ってみてください。次に親指を握って息を吸ってみてください。再

び手を開いて息を吸ってみてください。如何でしょうか。個人差はあると思いますが、手を開いたほうが息を吸い易かったのではないのでしょうか。深呼吸は健康に良く、昔センガイという僧は「500回深呼吸すれば、いかなる病も治る」と言ったそうです。深呼吸で老廃物を体外に出して健康になりましょう。

唄うことも健康に良いことですが、みなさんは唄われますか。

さて真面目なお話に戻して、さきほど長唄における三味線の音の出し方について、バチで「ひっぱたく」と申しました。このほかに、下から「すくう」と「弾く」音の出し方があり、この3種類の方法でリズムを奏でます。

3種類の音を幾つか演奏

■スポーティな面も楽しめる「櫓太鼓」

長唄における三味線演奏の場合、いかに細かく速く弾けるかを楽しむ、スポーティな面もあります。そのような曲として「櫓太鼓」をご紹介します。櫓太鼓は、現在でも両国国技館で見られますが、翌日の相撲興行を知らせる太鼓で、昔は深夜から明け方まで鳴らして放しだったとか。「櫓太鼓でふと目を覚まし、明日はどの手で投げてやる」という都々逸があります。

俳句では小林一茶の「薄暗き櫓太鼓や隅田川」があります。なお寄席においては、開演前に一番太鼓を叩きますが、これは櫓太鼓と同様に興行開催を知らせるとともに、お客様皆さまに楽しんでいただく願いを込めて叩きます。長めの曲ですので、「ひっぱたく」「すくう」「弾く」をどこで使い分けているかもご覧いただきながら、お聴きいただければと思います。

「櫓太鼓」唄と演奏（約5分）

■三味線は生き物のように敏感

細かく弾くことで、どれだけ時間を細かくとらえることができるのかという、演奏者自身の限界への挑戦にもなり得る曲です。

三味線は湿気をとても苦手とする楽器で、我々演者は三味線の近くではお茶も飲まないほどです。梅雨には三味線の音色もジトツと湿り、梅雨が明けると湿気が放出され三味線の皮が破れてしまうことも多いです。しまい込んだ三味線は機嫌をそこねて皮が破れ、使い続けていけば皮は破れない、まるで生き物のような感じがします。

■健気な冷蔵庫をほめる自作曲

私は三味線が好きで学び始め、現在寄席そのほかの場で演奏させていただいておりますが、伝統的な三味線曲は必ずしも大勢のお客様に馴染みがなく、聴かれるときにお客様が身構えてしまわれる、そんな事があります。音楽は楽しみのためのものですので、お客様に身構えられぬよう、馴染み易い曲も演奏しようと考え、曲を自作・演奏することも始めました。シンガーソングライターでもある私の曲を1曲、演奏させて頂いてよろしいでしょうか（会場、拍手）。ありがとうございます。

それでは「れいぞうこの唄」を演奏します。私はモノにも心があると思いながら暮らしているタイプで、20年以上使っている我が家の冷蔵庫をほめるために作曲しました。コンセプトは、アルプスの涼風をみなさんにお届けしようとの想いの唄です。昨年8月に「笑点」で演奏し、ご好評を頂きました。シンプルなメロディですので、覚えるつもりでお聴きいただき、お家に帰られたらご自分の冷蔵庫の前で歌って下さい。

「冷蔵庫のうた」唄と演奏（約2分）

自画自賛になりますが、歌詞が1番と2番で韻を踏んでいるところなど、いかがでしょうか。（会

場の出席者とこの曲の節回しを発声し練習)

次は、「都々逸」のお話をします。俳句は字数 5-7-5、短歌は 5-7-5-7-7 ですが、都々逸は 7-7-7-5 となります。「音頭」と「甚句」も同じく 7-7-7-5 です。

私が人生で初めて出会った都々逸は、有名な作品ですが「信州信濃の新蕎麦よりも、あたしや貴方のソバがいい」でした。合計 26 文字の制約の中で、これだけウィットに富んだ愛の告白をする、まことに名作だと思います。昔のお座敷では、このような都々逸を即興で作って遊ぶことが行なわれたそうで、豊かな文化だと思います。前に演奏した「さわぎの唄」においても、「隅田川さえ竿さしや届く、何故に届かぬ我が想い」も都々逸です。

■都々逸を努力して学んだお大尽たち

お座敷でこれらを唄うにあたり、客のお大尽たちは、お稽古事として何らかの唄を習ってお座敷に備えるわけです。以前お招きいただいた屋形船で、お客様の某会長が「夕方 5 時までにはしっかり仕事する。その後のお座敷には子供のような心で遊びに行く。芸者のお姐さんに都々逸を褒めてもらうために、どれだけ努力したか判らない」と話されていたことがありました。都々逸は音楽的にも面白く、決まったメロディがありません。メロディは都々逸の唄い手が、即興で自作しながら唄います。例えば本日のような広い会場であれば、

「信州信濃の——」唄と演奏（約 1 分）

このようなメロディで。また、小さなお座敷で小人数の場合は、

「信州信濃の——」（お座敷バージョン）イントロ

このような感じで。如何でしょうか。このように唄いの自由度が高いのが都々逸です。都々逸には決まった「拍子」もありません。唄い手が自由に、例えば自分の得意とする発声域の部分伸ばして唄うことも出来ます。そして息継ぎの時に、三味線がほどよく演奏を入れて、唄い手に息を吸わせてくれる。本日は私が一人で唄と演奏をしておりますが、通常都々逸では唄い手と三味線弾きは別々の人ですので、唄い手が自由度高く唄う、そのどこで三味線の演奏を入れるか、それが妙技となります。「三味線弾きは女房役である」と言われ、三味線演奏者は唄を集中して聴き、絶妙なところで音を入れる。それが出来るようになるのは簡単な事ではありません。

■名人は楽な力で実に良い音が出る

「糸とバチは直角に当てるように」と言われます。それによりジャストミートし、楽な力加減で一番良い音が出ます。男性の場合、女性より力が強いので、力で大きな音を出そうとする男性もおられますが、どうやら必要なのは力ではなく、身体のバランス、さらには演奏者の周辺の空間、演奏者の精神的な内面、更には仏教の考え方で成層圏や宇宙全体を演奏者自身と共有する、と感じながら演奏すると、名人の場合、楽な力で実に良い音が出ます。このように日常では考えない事、感じない事、使わない身体を開発していくのが江戸時代に開拓された「道」という稽古事で、修練を積むほどに心身が健やかになっていく感じがします。

■「Take Five」を都々逸の歌詞で

「落語が好きな人はジャズも好きである」という都市伝説があります。また、落語が好きなジャズメンが多くおられることは事実です。若い方々の三味線知名度を上げるべく、私は寄席でジャズ曲を三味線で演奏もしていきまして、本日はジャズ「Take Five」（5 分付き合ってくれ、の意）に都々逸の歌詞を合わせて、奏でさせていただきます。

「Take Five」演奏と唄（「隅田川さえ——」「信州信濃の——」）（約 2 分）

■糸を黄色に染めるのはうこん

現在の三味線の素材のうち、糸だけが日本製で、絹糸です。胴は「花林」、棹は「紅木（こうき）」で、どちらも熱帯樹の木材です。糸巻は黒檀あるいは象牙。絹の糸は切れ易いのでナイロンの糸を使う方もおられますが、ナイロンは硬く、指を糸の上ですべらせると指が火傷することがあります。絹糸ですと指は焼けません。不思議なものです。

ここでクイズです。三味線の絹糸は、白い糸を黄色く染めたものを使いますが、どのような染料を用いるのでしょうか？ (1)顔料（黄色の絵の具）、(2)ひまわりの花びらの色素、(3)うこん（ターメリック；カレー粉の黄色）。正解は(3)です。細糸であれば300本の生糸をより合わせ、餅で固め、それに着色しています。昔、「瞽女」とよばれる、三味線を演奏する盲目の女性旅芸人たちがおりました。この瞽女さんが演奏で使い終わった古い三味線の糸を訪問先の村人たちはもらい受け、煎じ薬として使ったというお話があります。糸は絹、餅、ウコンから出来ていますので、さもありなんという感もします。

三味線は使い続けると特定の箇所がすり減ってきます。上手な人ほど毎回同じところを押さえて使うので、同じ箇所が削れていく。削れると音に変調をきたしますので、時々棹全体を整形し、削り直してもらおう。そうすると棹はだんだん細くなっていき、お祖母さんから譲り受けた三味線は棹がすごく細くなっていた、というような事もあります。

■再利用でSDGsに貢献

三味線の皮は犬または猫の皮で、破れたら張り替えなければなりません、破れたあとの皮は、北陸金沢の金箔製造用の道具として再利用されているそうです。

音楽は、聴くのみならず参加することで更に健康促進効果が高まる、との学説があります。ここでみなさんに手拍子で参加いただきたいと思います。「奴さん」です。

（文大出席者と、手拍子練習）

続いて掛け声（おはやし；お囃子）もお願いできますでしょうか。お囃子の語源は「はえる（生える）」から、「他者を生かす」ことだそうで、民謡ではお囃子専門の唄い手もおられます。大きな声でなくとも結構ですので、みんなを元気にするよう、声をポーンと投げるようなイメージでお願いします。

（お囃子「あーこりゃこりゃ」と手拍子の練習）

大変結構です。では本番にまいります。

「奴さん」唄と演奏、出席者の手拍子とお囃子（約1分半）

■「奴さん」掛け声がアラブ人にも大受け

私は市川市の25の保育園で「奴さん」を演奏し、全ての園で子どもたちが、教える前から手拍子をとってくれ、大変かわいかったことを覚えています。2017年にはパレスチナ難民キャンプに慰問に伺い、ベツレヘムで「伊勢音頭」と「奴さん」を演奏しました。その折、地元の民族音楽アラブ音楽はハイテンポの曲が多いため、地元のお客さんの手拍子が倍速で、私が演奏途中で「はーこりゃこりゃ」と掛け声を入れると、客席に爆笑が沸き起こりました。アラブ音楽に慣れた地元のお客さんにとって「掛け声」は未知の音楽体験であるため、驚き、かつ楽しく、笑うしかなかったと、当時その場にいたアラブ人の友人が、数年後に話してくれました。このように、文化が異なることは争いのもとではなくお互いを惹きあう魅力となるのではないのでしょうか。

【質疑応答】

Q：私は寄席と落語が好きで、本日のご講演はあたかも寄席を聴くようで楽しませていただきました。三味線との出会いはどのようなもので、三味線を職業にされるにあたって葛藤はありませんでしたか？

A：5才からピアノを習い、将来音楽で立身してゆくのでピアノは必要と考えていました。しかしピアノはあまり上達せず、小学4年から合唱部に入部し、声楽を志しました。中学では吹奏楽部に入部、フルートとピッコロの演奏を高校まで続け、唄うことも好きだったので中高でオペレッタとミュージカルも学びました。このように洋楽どっぷりの世界で、当時はCDも無かったので、「エアチェック」という、ラジオ音楽を録音し学ぶことを続けていました。邦楽は当初、食わず嫌いでした。山形出身の祖母が民謡好きであったため民謡は聴きましたが、三味線も箏も琵琶も当時の自分には「居心地が悪い」ものでした。

私は、恩師の勧めもあり東京学芸大学教育学部音楽科に進学し、音楽教師を目指しました。大学では洋楽に加えて邦楽もがっちり学ぶことができ、邦楽サークルに入会、大学2年で三味線を本格的に学び始めました。

しかし音楽教師を目指していたためあくまでも主体は洋楽で、2年間ウィーンに音楽留学もさせていただきました。ウィーン空港に降り立った時「ああ私は帰ってきた」と感じたほどでしたが、石造りで土のないウィーンの町に、やがて息苦しさを覚えるようになりました。

帰国後、邦楽サークルで仏教音楽、尺八を学びました。

就職の時期となり、当時は団塊世代の音楽教師が大勢いたため音楽教師採用は狭き門で、恩師から「横浜市の音楽教師採用倍率は200-300人に1人」と聞き、これは無理と諦め、教員資格は取得していたので登録だけしておいたところ、幸運にも採用され、2年間教員をやらせていただきました。しかしこの間に「三味線をもっと弾きたい、学びたい」との意欲が強くなり、教員は2年間で終え、三味線・長唄の勉強を本格的に始めました。

ここで挫折を経験しました。長唄界は現在でもそうですが、男性にしか仕事がない。男性のみで歌舞伎を演じ、男性のみで曲を演奏する、基本的にこのような男社会で、女性は市井で稽古師になりましょう、という世界です。男女雇用機会均等法とは別世界で、どうしようもなく、成す術なく挫折しました。

一方で自分は、三味線プレイヤーとして独り立ちしてからでないとな人に教えるのも気が引ける、と思っていたところ、寄席囃子の三味線は女性演奏者のみでやっていると三味線の師匠から伺いました。寄席が行なわれている国立劇場に尋ねると、折良く「現在2年に1度の寄席囃子研修の募集中」とのことで、受験したら合格して2年間国立劇場で研修を受け、修了後、寄席のお囃子として落語芸術協会に所属し、数年前にお囃子から音曲師に転向し、現在に至っています。

男社会の歌舞伎・長唄界において、自分は男でないという葛藤が先ずありました。それでも好きな三味線で食べていくため、これ以外の選択肢はないという状況で、親の猛反対も退け、何か良く判らないまま突っ走ってきた感じです。

2年間の音楽教員生活は、お給料をいただきながら生徒たちと充実した楽しい日々を送らせてもらいましたが、一方で、自分の勉強を行なえる時間がなくなっていくと感じました。自分の時間を売って給料を得ている、との感に耐え難くなり、一方お金は貯まるので「このままいくと、収入安泰で三味線をやらなくても良いと思うようになる」との危機感も生じ、教職を去りました。



Q：ユーチューブで師匠がピアノを演奏され、チェロ奏者と共演されている動画を拝見しました。どのような頻度で洋楽器と共演しておられるのかですか。また、洋楽器との共演時にはどのような三味線の音色を出されるのでしょうか？

A：自分はピアノ愛好家だが上手ではなく、フルートも下手の横好きでした。声楽については、自分の声はやや特殊でクラシック音楽向きではない、と指導者に伝えられました。それでは自分が演奏するのはどの楽器が良いか、指揮と作曲分野も含めて、大学時代は試行錯誤を重ねました。そうした中、初めて三味線を習った指導者から「三味線は一音成仏（いちおんじょうぶつ）の心で、ひとバチひとバチ当てて音を出していく」と教わり、大変印象深い思いをしました。洋楽は「音を重ねてゆく」音楽ですが、邦楽では「一音で世界が変わる」。この研ぎ澄まされた邦楽の世界に魅了されました。尺八、琴、三味線を学び、最終的に三味線を選択して現在に至っており、そのことには満足しています。その後に指圧や仏教も学び、それらと関連付けて考察し、三味線の素晴らしさを改めて感じています。この楽器を後世に伝える伝道師となるべく、頑張っています。お答えになりましたでしょうか？

桂 小すみ（かつら こすみ）師匠のプロフィール

東京学芸大学卒業。同大学在学中に文部省(当時)派遣によりウィーン国立音楽大学に留学、ミュージカル専攻科を特別賞で修了。

音楽科教員を経て、NHK 邦楽技能者育成会 44 期修了。細棹三味線を野口美恵子、長唄三味線を杵屋佐之忠に師事、杵屋佐之萌の名を許される。

国立劇場にて2年間の寄席囃子研修修了後、2003年よりお囃子として落語芸術協会に所属。寄席、各種落語会、学校公演等に参加。

三味線漫談の玉川スミに俗曲を師事、師の引き立てにより、2018年寄席囃子から音曲師に転向、三代目桂小文治一門、桂小すみとなる。唄、三味線の他尺八を吹き洋の東西を問わず取組む。古典のみならず、オリジナルの新作も手がけ、三味線又はピアノ弾き語りのシンガーソングライターとしても活動。

演劇、朗読劇の音楽制作(作曲・演奏)やラジオ番組、ジングル制作にも取り組む。桂夏丸とのユニット「サマスモ」、三遊亭遊七、神田桜子とのユニット「コムソウ」での音楽余興つき公演、クラシック音楽家とのユニット「りゅばん・ぷりえーる」他、各種多分野の音楽家、パフォーマーとの交流も意欲的に挑戦。浅草演芸ホール8月上旬の囃家ディキシーバンド公演ではキーボードを担当。

(受賞歴)

2019(令和元)年度 国立演芸場花形演芸大賞「銀賞」

2020(令和2)年度 同「金賞」

2021(令和3)年度 同「大賞」。

2023(令和5)年度 第40回浅草芸能大賞新人賞

2023(令和5)年度 芸術選奨文部科学大臣新人賞